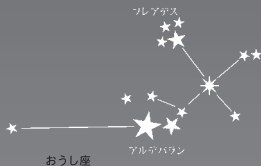


# ポラリスを仰ぐ北の大地から



## 最近の思い

岩内古宇郡医師会 会長 千葉 理

医師会の会議でいつも問題になるのは地域医療における担い手の不足です。

私が父の診療所を継承したのが2000年5月。当時の岩内町の人口は減少傾向とはいえ約17,000人ほどでした。ちなみに現在は11,000人ほどです。当時の懐かしい話をひとつ。事務員1人の補充に対して12人もの応募があり、6人の最終面接を行いました。最後の2人のどちらを選ぶか迷い、父に相談したところ「2人とも雇っておけば」と軽く一言。今思えばその当時は人材にも資金にも困らなかったのだなあ。話は変わりますが、私が勤務医時代には夜中に呼び出されるのは当たり前。徹夜で仕事を終わると妙な達成感を感じ、看護師も「私が当直だどつくのよねえ」となにより自慢気。こんな感じで過ごしたので自分が体一つで働くのは苦になりませんが、スタッフが集まらなければどうにもなりません。近隣リゾートへは破格の時給で働き手が流れて行きます。物価高で皆、生活がかかっています。私でも魅力を感じます。当院といえばもうすぐ築25年。設備を含め順序よく壊れてくれればありがたいのですが、なぜかいつに壊れます。さらには医療DXの推進。これからの医療にとっての意義や必要性は十分に理解できます。しかし、さらなる投資や人材の必要性を考えると、これからどうしたものかと悩みます。明るい話をお伝えしたかったのですが愚痴ばかりで恐縮です。そんな今はいかに軟着陸をして第二の人生を送るかを考える日々です。リタイアしたらさあ何をしようかと空想にふけています。海外旅行？ゴルフ三昧？バイクで冒険の旅？そんなことを考えながら夜ごと楽しく一杯。それまではもう少し頑張ります。



## 愛猫の死と介護

富良野医師会 会長 小山内裕昭

先月、2匹いる愛猫の内の1匹（めぐ）が亡くなった。15歳だった。雌だったが、メインクーンという大柄な品種で、若い頃は全長1尺、体重は10キロを超える大柄な子だった。ただ、性格は臆病で、普段から隠れてばかりで、それでも名前を呼べば必ず振り向いて「にゃあ」と返事をしてくれ、時には、寄ってくることも、ごくたまにあった。

今年に入ってから腎臓がとても悪くなっていることがわかり、みるみるうちに痩せていき、体重は10月には3キロを切ってしまった。動物病院で毎日、猫のために点滴を打ってもらいに行く、そのおかげで容体は落ち着いたが、神経がやられたせいか、下半身を引きずって歩くようになってしまった。そのため、歩く速度が遅くなり、トイレに間に合わずに漏らしてしまうこともあり、家中にトイレシートを引いて対応するが後片付けも一苦労だ。また、動く距離も短くなり、お風呂場などで一日中ずっと寝てばかりいるようになった。

さらに亡くなる1か月前くらいからすごく甘えるようになった。これまでは帰宅しても無反応だったが、帰宅するとすぐに寄ってきて隣に座るようになった。これまで一緒に寝ることはほとんど無かったのに隣で寝るようになった。今思えば、死期を悟って最期のお別れを言いに来てくれたのかもしれない。亡くなったのは夕方、ちょうど帰宅しようとしていたタイミングで連絡が来た。帰宅後、しばらくは腕に抱いて見守っていた。「めぐ。お疲れ様。今までありがとう」と伝えた。

医療は人間だけでなく、猫などの動物の世界でも進歩していて、長寿になる傾向にあるという。そのため、認知症やパーキンソン病など人間でも加齢と共におなじみの病気を併発し、介護が必要になる猫もいるという。飼い主も高齢化しており、高齢な人間が高齢な猫を介護する「老々介護」に陥るケースもあるという。猫も認知症になると徘徊したり、夜泣きがひどくなったりすることがあり、人間ほどではないかもしれないが、苦労は多い。都市部では、動物を介護するヘルパーや猫の老人ホームが登場しているようだ。ただ、料金も高く、田舎では普及していない。生き物は一生の面倒を見るのが原則。今回の経験が自分たちの年齢を考えながらペットを飼う必要があるなと体感した。もう1匹の猫も17歳。いつも寝てばかりで、これまで何度も入院と退院を繰り返している。そろそろお迎えが来るかもしれない。私も69歳。もう1匹を最期まで看取るためにも元気でいたいといけない。

この思いを、強く持ち筆をおく。